



#31

# 妖怪ウイッシュ!

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

「ヒデ兄、あたし妖怪になりたい！」

窓の外に満開の桜が見てとれるような、春のうららかな朝。

そんな平和な日常を打ち破るように、妹の美春がまた変な事を言い出した。

「ねえ、どうやったたらなれるかな？ どうやったたらなれるかな？」

「どうやっても無理に決まってるんだろ」

ツインテールをびよんびよん揺らしながら重ねてアホな質問をしてきたので、俺は木で鼻をくくったような返事をしてやった。

「そもそも吸血鬼とかゾンビとかっていうのは空想上の産物で……」

「違うもん！」

美春はぷーっと頬を膨らましてこちらを睨んでいる。どうやらおかんむりのご様子だ。

そうか、こいつ中一になってもまだサンタとか信じてるような奴だったっけ。

ちよつと夢のないこと言い過ぎたかな。

「あたしがやりたいのは妖怪なの！ 和風なの！ 吸血鬼とかゾンビは洋物だから違うの！  
あたしは座敷童子とか猫娘になりたいの！」

そっちかよ！

思わず突っ込みたくなる気持ちを抑えて、俺はさらに優しく美春を諭した。

「あのな、美春。人間は人間だから、妖怪にはなれないんだって。判るだろ？ 判ったらそ

ろろ学校行こうな？ な？」

「……なれるもん」

美春は唇を失わせながらそう呟いた。

「はー……。だいたいどうして妖怪なんかになりたいんだよ。お姫様とかスーパーモデルになりたいとかだったらまだ判るけどさ」

「あのね、あたし妖怪になってモテモテになるの！」

「はあ？」

もう前提も過程も結果もすべてがおかしすぎて、どこからつっこめばいいのか判らない。

「だって妖怪ってみんななかつこいし綺麗でしょ？ 妖怪になったらモテモテのモテカワだよ！」

「あー、そうだな、モテモテのモテカワだなーなれるといいなー妖怪にー。まあ、とりあえず  
メシ食って学校行こうぜ」

俺は美春を適当にあしらいながらトーストを口にした。

この残念な思考回路&発言がなければ十分に美少女として通用する外見なのにもつたいないよな。

ま、いいか。

その方が他の奴にモテるってこともないだろうし。そうすればずっと俺だけの美春でいてく

れるだろうから……。

「あゝあ、妖怪みたいな女の子いなかなあゝ」

「ぶーっ!!」

昼休み。隣の席の増田のため息混じりの言葉に、俺は飲みかけの牛乳を盛大に嘔いてしまった。

「なんだよ、竹谷きつたね〜な。俺にかかったらどうすんだよ」

茶髪に鼻ピアスと、とても判りやすいチャラ男の増田が顔をしかめてオレに文句を言ってくる。

「げほっごほっ……な、なんだよ、増田、妖怪みたいな女って?」

「だって座敷童子とか猫娘みたいな彼女がいたら可愛いじゃん?」

まさかのベストマッチング。

瞬間、俺は心に決めた。

何があっても増田と美春だけは引き合わせてはならないと。

俺の大事な美春を守るためにも!

「ヒデ兄ーいるー? 増田さんって、ヒデ兄と同じクラスの人ー!？」

「ぶーっ!!」

本日二度目の牛乳スプラッシュ。

突然教室に入ってきた美春にこんなことを叫ばれば、スプラッシュもフィーバーするとうものだ。

「誰? 可愛いじゃん。あれ竹谷の妹?」

「いや、違う! なんでもない! なんでもないから美春ちよつとこつち来い!」

「え〜なんで〜増田さんは〜?」

ぶーたれる妹をずるずる引きする形で俺は教室をあとにした。

◆  
旧校舎の屋上。幸い辺りに人気はない。

「今度はなんだ? まさか増田が妖怪だとも言い出すんじゃないだろうな?」

俺は美春を正面に立たせて、やや詰問気味に訊く。

「違うよ?」

美春はきょとんとした表情で小さく首を傾げた。

それに合わせてツイテールがびよこんと揺れる。

ああ、くそ可愛いな、こいつは！

「でもね、増田さん、雪女ゆきなんなとつきあったことあるんだって！」

「はあ!？」

「だからその雪女さんを紹介してもらって、どうやったらあたしが雪女になれるか聞きに行くの！」

天真爛漫てんじんらんまんな笑顔でトンデモな事を言う我が妹。

「ね、だから増田さん紹介して！雪女ゆきなんなさんのこと聞きたいから！」

「いや、それだけは絶対だめだ！」

「えー、なんでー!？」

「なんでもかんでもとにかく増田だけは絶対ダメ！太陽が西から昇っても絶対ダメ！……そうだ！俺がその『雪女』さんの事を増田から聞いて、それをお前に伝えればいいだろう？」

「うーん……別にそれでもいいけど……」

釈然しやくぜんとしない様子で、それでもしぶしぶ納得する美春。

ふー、あぶないところだったぜ。妖怪彼女希望の増田に、妖怪変身願望のある美春を引き合  
寄せたら一体どんなことになるか……。

考えただけでも恐ろしい。

「じゃ、増田にはちゃんと聞いてやるから、また放課後な」

「うん！」

俺の言葉に美春は心底嬉しそうに頷うなずいたのだった。



放課後。

俺と美春は生徒会室に向かっていた。

増田によると、なんと生徒会長の丹原美樹たんはらみきその人が雪女だというのだ。

「おい、竹谷、ひとつだけ忠告しておくぞ。お前がどんなつもり知らないが、丹原だけはやめておけ。下手に隙すきを見せたら一発で凍こおらされるぞ。俺もたいがい妖怪の女好きだけど、あいつだけは全然だめだった。命が惜おしかったらマジやめといたほうがいいぞ」

増田に「雪女」のことを聞いたなら、普段ちゃらちゃらしているヤツにしてはめずらしく真剣な顔でこう言ってきた。

……馬鹿馬鹿しい。

雪女なんかいるわけないっつーの。

まあ、でも美春をその丹原さんとやらに会わせて普通の人間だと判れば、「妖怪なんて存在

しない」という事実には納得するだろ。

隣でうきうきしながら「雪女さんってどんな人かな〜」とスキップしている美春には悪いが、これが現実というものだ。

「失礼しまーす」

俺はノックをしてから生徒会室のドアを開けた。

と、同時に思わず息を飲む。

テーブルの奥に、我が目を疑うような美人が座っていたからだ。

流れるような黒髪はシルクのような光沢を持ち、黒緑色の瞳は見る者を深淵しんえんに引き込むかのような蠱惑こわくてき的な光を宿していた。

日本人形のように白く透き通るような肌と、黄金律に沿って配置されたような目鼻立ちもはや人間を超越した美しさを呈ていしていた。

そしてなぜか丹原さんは制服ではなく、着物を身につけていた。

それも浴衣のような簡易的なものではなく、着付けが必要な超本格的なやつだ。

「うわー、丹原先輩きれいー！ 着物もとってもお似合いですねー！」

俺の隣で美春が無邪気に丹原先輩を誉める。

「ふふふ、ありがとう……。やっぱりコーディネートはこーでねーと、ね」

……!?

さぶっ!?

え、なに今の!?

超妖艶ちゆうようえんな笑みを浮かべながら、超しようもないタジヤレをおっしやつてるんですけど!?

「あなた達が来るのを待ってたわ」

美樹は囁ささやくようにそう言った。

「え？ どうして俺たちが来ることを？」

「ふふふ……壁に耳あり、障子にメアリーよ。Do you understand?」

さぶっ!?

……!?

凍らすってこと!?

……そうか、この人はまた美春と違ったタイプの残念美人ってことか……。

「あはははは、『コーディネートはこーでねーと』だってー、あはははは！ 面白いねーヒデ兄ー！」

……うん、そういう風に素直に笑えるって幸せでいいよな……世界中の人がお前と同じ思考回路を持つてたら戦争とかも起らないだろうにな……。

「はいはい！ 単刀直入に訊きますけど、丹原先輩は雪女ですか？」

「ええ、そうよ」

「あたしも雪女になれますか!？」

「あなたみたいに可愛い子だったらすぐになれるわ」

「わー! ほんとですか! やったー!？」

丹原先輩の回答に美春は部屋中をびよんびよん飛び跳ねて喜んだ。

………つたく、無責任な事言って美春をぬか喜びさせないでもらいたいもんだぜ。あとでフォローするのは俺なんだから。

ま、いいか。「雪女」の正体も判ったし、今日はもうこれで帰……

「ん?」

瞬間、俺の背筋をぞくりとするような寒気が通り抜けた。あまりの悪寒に全身が総毛立つ。

「一体……」

言いかけて俺は驚愕した。

俺の吐く息が白くなっている!？」

そんな馬鹿な。

もう桜も満開のこの時期に?」

「ふふふ………本当に、すぐ、なれるわよ……」

刹那、丹原先輩を中心に風が巻き起こった。その風は強烈な冷気を帯びていて、生徒会室の温度をあつという間に下げていく。

やがて風には小さな雪が混じり始め、部屋の中は大吹雪のような状態になった。

「み、美春……!!」

俺はあわてて美春の許に駆け寄ろうとしたが、強烈な風と雪でまったく動きがとれない。

間断なく、雪が頬を刺すようにぶつかってくる。

美春は丹原先輩を抱かれ、うっとりとした表情でその双眸を見つめている。

やがて美春の唇は紫に変色し、肌の色もどんどん白くなって生気が失われていく。

まさか、本当に丹原先輩は雪女……!？」

「美春! 早くそいつから離れろ! 早く離れ……美春……!!」

やがて俺の眼前は完全にホワイトアウトし、同時に俺の意識もぷつりと途絶えた――。



「ヒデ兄、朝だよー!」

「!」

俺はベッドから飛び跳ねるように半身を起こした。

目の前に広がるのはいつもの俺の部屋。いつもの元気な美春。

「夢………だったのか……?」

俺は安堵あんどのあまりまたずるずるとベッドに倒れ込んでしまった。

「ほら、ヒデ兄いっせん、二度寝はだめだよ！ 学校遅れちゃうよ！ えい！」  
美春は気合い一閃、俺の掛け布団ふとんを勢いよく引き剥はがした。

「じゃーん！ 布団がふつとんだー！ なーんちゃって！ あはははは！」  
「は、はは。なんだ、そのダジャレ。……ダジャレ？」

俺が訝いぶかしげに眉まゆをひそめた時、美春を中心に冷たい風が渦を巻き始めた。

おしまい